

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



『シーベルト』 測定隊が行く!!

「あなたち、『シーベルト』やってるのかえ？ ここは幾つなの？」
「1.53 μ Sv/hです。」
「ありがとう」と、軽トラックの運転席から手を振っていく元気なおばさん、道路で測定していると庭先から出てきて「うちの玄関廻りと部屋を測ってくれないか？」と駆け寄りおじいさん。6月中旬から始めた南相馬市全域の放射線測定は、こんな光景の中で3回にわたり実施し、7月10日に今期の測定を終了しました。



4月中旬、チェル救が震災後初めて福島を訪問し、南相馬の桜井市長から「市には放射線量計が1台しかなく、汚染の実態が把握できず困っている」との話があり、私たちは直ぐに南相馬市全域(20^キ圏内の小高区を除く)の放射線量を測定し、汚染状況を把握することを約束しました。その後、6月上旬には測定器がまとまって入手でき、再度南相馬市役所を訪問し、6月中旬から作業を開始できることを伝えました。市側も協力的で、諸施設一覧表・市内詳細地図等の提供を受けました。測定は原町区・鹿島区を500mメッシュに分割して、1地点で地上1cmと1mの2観測を行うことにしました。

第1次の測定作業は、暑い晴天の中、徒歩での測定作業になりました。住民の皆さんから「何をしてるんだ！」と、非難が出るのでは？と不安感を持ちながらのスタートでしたが、冒頭に述べたように思わぬ声掛けをいただき、勇気づけられました。また、「今後協力をしていくから連絡先を教えて…」とか、鹿島区のボランティア連絡協議会からは、「地区での測定は私たちも参加する」との申し入れを受け、思わぬ協力体制ができあがりました。それだけ、住民の皆さんが生活圏内に不安を抱えて暮らしていることが、深く胸に突き刺さってきました。第2次、第3次の測定は、地元の皆様のご協力のもとスムーズに進み、今後の協力関係も少しずつでき上がってきました。ご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。〔詳細はP2～P3参照〕 (測定隊長 神谷俊尚)

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名:三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部(店番号 150)

口座番号:普通 6949211

口座名義:特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 神谷 俊尚

郵便振替:00880-7-108610

TEL / Fax:052-732-7172(月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ:<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

「放射線量率マップ」から見えてきたこと



～復興の芽を育てよう～

(測定隊員 池田光司)

南相馬市の放射線量率測定が終了しました。

測定を行った南相馬市は3つの区から成り、福島原発に近い南側から、小高区、原町区、鹿島区となります。このうち小高区は20km圏内で立ち入ることができないため、原町区と鹿島区の測定となりました。原町区と鹿島区の境界が、原発からほぼ30kmの位置です。地図上に縦横それぞれ500m間隔に線を引いて、500m

四方のブロックに区切り、各ブロックの道路上の1ヶ所を選び、地表から1mと1cmの高さで測定を行いました。2～3人で一組、計六組に分かれて、それぞれ測定器を1台ずつ持ち、担当となった地域の測定ポイントを回りました。2回目以降は各組に地元の方も加わり、より地域と連携した活動となりました。6月末から7月上旬にかけて3回、のべ5日にわたる測定で、原町区と鹿島区のほぼ全域の放射線量率を測定することができました。のべ参加人数はチェル救35名、現地31名。測定ポイントは536(放射線量率マップに使用したもの)、500m四方のブロック数では478になりました(ブロック内で2ヶ所もしくは3ヶ所測定したところもあるため)。測定終了後、大急ぎでマップ作成に取り掛かり、株式会社シェアリングネット様の協力も得て、500m四方のブロック単位で色分けされた「南相馬市放射線量率マップ」が完成しました。7月末までに2,000部が刷り上がり、8月初めに南相馬市で報告会を開いて、市役所と測定に参加された方々を通して、地元の方々に配られる予定です。

測定の結果から、山側に放射能汚染の高い地域が広がり、山側から海側に向けてお椀の縁から底に向かう感じで、汚染の度合いが下がる傾向があることが分かりました。放射能汚染のレベルが原発の距離によっては決まらないこと、放射能汚染の高い場所がそこかしこに現れるわけではないことが、データで証明されました。また、計測された放射線量率(1m高さの γ 線を計測して求めた「マイクロシーベルト/時」)から自然放射線の影響を引いて、1年間に浴びる放射線の影響量を計算すると、年間1mSv以下のブロックが全体の5%、1～5mSvのブロックが72%、5mSv以上のブロックが23%となることが分かりました。「年間1mSv」は、ICRP(国際放射線防護委員会)が一般の人々に対して勧告している年間許容線量、年間「5mSv」は、放射性物質を取り扱う管理区域の境界での許容線量になります。大半の地域が、この間に入っていることとなります。外部被曝の影響を下げる取り組みをしながら、さらに、内部被曝に対する注意が必要なレベルとなります。

今、地元の人々が求めているのは、「どのくらいの放射線を浴びるのか」「浴びた放射線の影響はどのくらいあるのか」「放射線の影響を減らすにはどうしたら良いか」という質問に対する答えではないでしょうか。浴びる放射線の量は先ず知りたい情報です。実際、測定をしても「放射線の値はどのくらい?」「ここも測ってくれないか」という声が少なからずありました。そのような意味で、この放射線量率マップは、地元の方々が求めていたものだと思います。

復興を推し進めようとする、放射能が大きく立ちふさがります。放射能の恐さは、身体への影響もありますが、さまざまな思いや絆を断ち切り、対立を生み出すところにあります。一方、「放射能の影響はある」と理解した上で、放射能と相対し協力する中から、新たな絆が生まれ、新たな暮らし、新たな地域が築かれていく可能性もあります。放射能と向き合う中から生まれる復興の芽を大切に育てていく、そのような復興もあるのではないのでしょうか。今回のマップは決して大きな仕事とは言えませんが、つながりができるきっかけとなり、個々と全体が協調して放射能と相対する際の貴重なデータになると思います。今回のマップを基に、地元の方々と意見交換しながら、復興の芽を育てる支援ができていければと考えています。追って、具体的な支援の形が現れてくると思います。

これからが本番です。引き続き、みなさまのご協力をよろしくお願いいたします。

南相馬放射線計測 第一次&第三次に参加して（測定隊員 竹内 雅文）

～私たちが本当に見ていかなければならないものは、そのずっと先にある～

知らない町を訪れると、ただひたすら歩き回るのが私の旅のいつものスタイルであり、二日間、朝から夕刻まで地図を片手に計測点を求めて歩くこと自体には、何の違和感もない。ただ、今回は十数分ごとに訪れる停止の度ごとに、扱い慣れない黄色い計器が、聞き慣れない音を伴って数値を告げるのであり、その付近が、暮すには辛い場所であることを知らせるのである。そんな折、小さな子どもが不意に目の前に現れたりすることもあり、胸の締めつけられる思いがするのだ。激しい地震に襲われたはずなのに、破壊の跡の見えない町は、異空間のように人影もまばらだ。人々はひたすら家に閉じこもり、窓を閉めてじっとしている。農家の人など、野良にも出れず何もすることのない日々の連続は、もうとつくに限界を越えているに違いない。ツバメたちは何も知らずに飛び回り、ヒバリもホトトギスもさえずってはいるが、数が少ないように感じるのには先入感からだろうか？ 林道を少し入っていくとサルたちが顔を出し、タヌキたちまでが横切ったが、里に人影がまばらになったのを幸いに思っているのか。セシウム 137 は、彼らの束の間の喜びに、高価なまったく不当な代償を準備しているのである。この町に住む人々たちにとって、3月のたった数日の間に世界は大きく変わってしまった。そこにさまよい込んだか私には、いったい何が見えているのだろうか？ 数値を知ることには、幾つもの意味を付与することができるであろう。私たちの国が陥ってしまった事態の、あるがままの姿を知ることなしには、もはや私たちは先に進めないという確信めいたものがある。しかし数値は、黙って線量計のボタンを押して75秒待てば得られるのであり、私たちが本当に見ていかなければならないものは、そのずっと先にあるのであろう。

「だめ、近づけない。どうしよう…。」

（測定隊員 中熊 弘隆さんのツイッターから抜粋）

梅の大木の処理に関して、私たちは有効な対策を助言できないまま、母屋の中の測定に移った。「一番高い部屋を見て」と案内されたのは、窓のない納戸だった。その部屋はどこを測っても2～3 μ Sv/hもある。「ここは6が出る」と、男性は廊下と部屋の境から10センチ程部屋側の畳の上に自分の線量計を置いた。6.7 μ Sv/h。窓もない部屋でこの線量はあまりにも不可解。屋内の測定を終え、外に出ると男性は、「やっぱり、避難した方がいいかな」と、力なく僕らに尋ねるでもなく呟いた。彼は、既に自宅が危険な状態にあることを理解している。毎日、線量計を持って家中を測って回りながら、苦しんでいらっやるのだろう。僕は、男性が既に避難を決意しているように感じ、あれこれ助言は不要だと思った。



更に何軒かを回り、活動終了時間が迫ってきた。そこで、区長さんが「最後に、私の自宅をもう一回お願いしたいんですが」と言う。区長さんは、自宅裏手を見てもらいたいという。20～30坪の裏庭には簡易な駐車場があり、軽く砂利をまかれた土の上にはそこかしこに苔が生えている。2日間僕らと行動をともにした区長さんは、その環境が、高線量が出た家の環境に似ていると直感したのかもしれない。3人のスタッフは、裏庭各所の測定を始めた。苔の上は5～6 μ Sv/h程度、苔のない砂利の上も4～5と、どこも高い。僕が、駐車場脇を計測していると、女性スタッフの声がした。「ここ30出てる」。彼女は、台所出口脇の雨樋排水口付近を測定していた。近くで見ていた奥さんが後ずさりする。区長の奥さんは、口を手で覆いながら、「だめ、近づけない。どうしよう」と悚然と立ち尽くしている。区長さんは冷静だった。毅然として「俺が全部やるから、おまえは離れていけばいい」。彼は、自分のなすべきことは分かっている。この2日間、彼は訪問した全家庭の数値データをメモしてきた。そして、僕らと一緒に、ああでもないこうでもない対策を考えてきたのだ。僕らが彼に助言することなど何も無いのだ。

更に何軒かを回り、活動終了時間が迫ってきた。そこで、区長さんが「最後に、私の自宅をもう一回お願いしたいんですが」と言う。区長さんは、自宅裏手を見てもらいたいという。20～30坪の裏庭には簡易な駐車場があり、軽く砂利をまかれた土の上にはそこかしこに苔が生えている。2日間僕らと行動をともにした区長さんは、その環境が、高線量が出た家の環境に似ていると直感したのかもしれない。3人のスタッフは、裏庭各所の測定を始めた。苔の上は5～6 μ Sv/h程度、苔のない砂利の上も4～5と、どこも高い。僕が、駐車場脇を計測していると、女性スタッフの声がした。「ここ30出てる」。彼女は、台所出口脇の雨樋排水口付近を測定していた。近くで見ていた奥さんが後ずさりする。区長の奥さんは、口を手で覆いながら、「だめ、近づけない。どうしよう」と悚然と立ち尽くしている。区長さんは冷静だった。毅然として「俺が全部やるから、おまえは離れていけばいい」。彼は、自分のなすべきことは分かっている。この2日間、彼は訪問した全家庭の数値データをメモしてきた。そして、僕らと一緒に、ああでもないこうでもない対策を考えてきたのだ。僕らが彼に助言することなど何も無いのだ。

「男はこうでなくっちゃね！」僕は心の中で、「頑張れ、頑張れ」と呟いていた。

夢からひきずりだされて (測定隊員 柴原 洋一)

ぼく用の放射線の「教科書」にはこう書いてありました。「本質的に安全なものは『安全』の言葉を持って身を飾りはしない。『原子力の安全性』や『放射能汚染食品の安全性』などというのは、それ自身が矛盾である」「今日の放射線被曝防護の基準とは、核・原子力開発のためにヒバクを強要する側が、それを強制される側に、ヒバクがやむをえないもので、我慢して受任すべきものと思わせるために、科学的装いを凝らして作った社会的基準であり、原子力開発の推進策を、政治的・経済的に支える行政的手段なのである。」(中川保雄「放射線被曝の歴史」技術と人間、1991年刊)…今、読みなおされるべき「教科書」だと思います。

80年代の初期、自分の子どもが生まれたとき、原発を強く意識し始めました。芦原原発阻止闘争にも参加しました。しかし、原発と放射線について、調べれば調べるほど、途方にくれました。すべての原発を止める以外に助かるすべはないとわかりましたから…。そしてチェルノブイリ事故が起きました。日本にも放射能は降り注ぎ、汚染食品がやってきました。かの地の現実が伝わって来ました。ぼくは、幼子を抱えてオロオロするばかりの愚かな父親でした。

今は夢を見ているような心地がします。放射能で汚染された大地というのは、異国のことであつたはずでした。あのときから、二度と再びこのような事故を繰り返させてはならないと思いつけていたはずでした。しかし、南相馬市で放射線測定器のスイッチを入れれば、数字は否定しようのない現実を突きつけてきました。「きつと測定器は狂っているのだ。テレビの画像くらい捏造できるだろう。廃墟のような原子炉建屋のほんものは、ぼくは見えていない。事故など起きてないのだ。」そう思ってみたりします。しかし、家族と逃れて来た父親に会いました。幼子を連れて疎開して来た母親と話しました。夢に留まることはできず、ぼくは途方にくれたままです。

「福島から感謝をこめて」 (福島・未来塾すばる 大内 有子)

未曾有の震災から、まもなく5ヶ月…。猛暑の福島にヒマワリが咲き始めました。

4月13日、河田先生から「19日にチェル救スタッフ10名で福島入りします！」とのご連絡をいただき、緊急に開催した講演会は、事故後初めての市民集会でした。3月末に、福島で講演した山下俊一氏が「マスクは気休めですから、外してください。男は逃げずに、会津の白虎隊のように戦うべきです。」と暴言を放ち、「このままでは福島も命もスピリットも根絶やしにされてしまう」と危機感を抱いていた私たち…。そんな時、高レベルに汚染された福島市に駆けつけて、真実と希望のビジョンを示してくださった皆様に、今も感謝の気持ちでいっぱいです。本当に、ありがとうございました。



昨日7/26、河田先生からお借りした測定器で、福島市渡利地区を計測しました。いつも農作業の合間に、ベンツに乗って市内を回りますが、昨日は突然の雨で、車ごとびしょ濡れでした。なにせ愛車は、ベンツという名の自転車なので…(笑)。道路わきに積まれている側溝の汚泥袋に測定器を置くと、「40 μ Sv/h」を超えました。信夫山裏の通学路の草地では、「150 μ Sv/h」ものホットスポットも見つかっています。今、チェル救から提供していただいた腕時計タイプの線量計5器を福島市内の家族に貸出し、子ども達の被曝実態を調査しています。福島県は、3月15～16日に福島市の雑草から「119万ベクレル/kg」もの放射性ヨウ素を検出していました。しかし、そのデータは公表されず、私達は子どもと一緒に、水や食料の配給に何時間も並び、無防備に被曝してしまいました。怒りと悲しみで心が震えます。今後、私達自らが測定するデータが、避難と除染の提案に力を与えると確信しています。

皆様のご支援に感謝し、この夏も双輪のベンツで市内を走ります。福島の復活を夢見て！

福島原発震災から4ヶ月が過ぎた。炉心溶融を起こした原発の安定化にはまだ程遠く、依然として毎時 20tを越す冷却水を注入し続けなければならない状況は変わらない。チェルノブイリ事故の約 30%に及ぶ放射能を撒き散らした福島第1原発は、福島県をはじめ近隣地域に深刻な汚染をもたらし、農業や畜産業を破壊したばかりでなく、地域社会と家族を分断している。汚染は下水処理場や瓦礫処理、汚染食品や汚染した腐葉土などの流通を通じて、全国に拡散し始めている。今後長く続く放射能汚染とどのように向き合い、未来を作るべきか。

● 責任は明確にすべきである

放射能汚染が様々な分野で広がるにつれ、政府は今「ここまで汚染が広がってしまったのだから、それを受け入れるしかない」と国民に強いている。確かに汚染は広がった。福島以外にもホットスポットはあり、汚染牛の流通は全国化した。台所やトイレから排出された汚水や側溝から流入した汚水は、下水処理場で高濃度の放射能汚染汚泥を生じ、国は 8,000Bq/Kg 以下なら埋め立ても認める方針だ。今後、様々な経路を通じて、放射能は広く全国に広がっていくだろう。福島前と福島後の日本は違った世界にならざるを得ない。ウクライナの汚染地域の人々が自分達を「チェルノブイリ人」と呼んだことを思い出す。しかし、こうした事態を受け入れざるを得ないことと、それをもたらした者達の責任を曖昧にすることは、厳しく区別しなければならない。

● 内部被曝を軽視してはならない

マスコミに登場する長崎や広島の実験家、特に医療関係者や放射線専門家と称する人々は、「100 ミリシーベルト以下なら問題ない」と、しきりに吹聴している。これは大きな間違いである。彼等は原爆の被曝データを神聖化し、チェルノブイリに学んでいない。チェルノブイリの影響の 70~80%は内部被曝である。これを踏まえ、ウクライナは事故から 10 年目に食品の基準を大幅に変えた(右表)。

● 危険な日本の暫定基準

表をみれば、日本の暫定基準がいかにひどいものか一目瞭然である。現在、基準値以内の野菜や肉・魚などが、既に流通網を通じて広く全国に出回っていると考えるべきである。今話題の汚染牛肉の全頭検査でも、Kg あたり 499Bq 以下のものは出回るはず。その結果は明らかである。

今後、日本人は薄く広く被曝することになるだろう。それ

食品名	97年改定 ウクライナ	日本の 暫定基準
飲料水	2	200
パン	20	500
ジャガイモ	60	500
野菜	40	500
果物	70	500
肉類	200	500
魚	150	500
ミルク・乳製品	100	200
卵	6(1個)	500(Kg)
粉ミルク	500	500
野生ベリー・キノ	500	500
幼児用食品	40	500
放射性セシウムについて：単位はベクレル/Kg		

は誰にも止められない。それを止めるには、早く暫定基準を改定するしかない。それを可能にするはずだった食品安全委員会は、この暫定基準を追認するに留まった。これでは国民の将来が危うい。

● ゆっくりと、しかし大河は流れる

一方、国民の意識は確実に変わりつつある。

原発に頼らないエネルギー社会の実現に向けて、今後様々な取り組みが加速するだろう。福島県は原発推進をやめ、持続可能エネルギー推進を決めた。私たちが支援している南相馬市も、その方向で政策を検討しつつある。

7月に訪問したウクライナで、ナロジチを抱えるジトール州知事は「ナロジチ菜の花PJの成功を評価し、来年度から州内で30万haの菜の花栽培とバイオエネルギーを推進する」と公表した。世界は確実に変わりつつある。

(河田)

キャンペーン「日本を救おう!!」(ウクライナ)



「チェルノブイリの人質たち」 基金理事 ヴラディーミル・キリチャンスキー

ジトームル州の住人たちは、日本の震災と福島第一原発事故についてのニュースを、自らに降りかかった不幸のように受け止めた。まさにジトームル州が、

ウクライナの諸州の中でも、チェルノブイリ原発事故の被害を25年にわたって最も多く受けてきたことを思えば、それはごく自然なことである。州人口の3分の1(44万人)は、今日も汚染地域に住み続けている。

汚染地域に属する9地区の中でも、最も汚染されているのはナロジチ地区である。この地区に対して、「チェルノブイリ救援・中部」がもう20年にわたり支援を続けているのである。そのため、ナロジチ地区の住民たちは、福島の実災者を支援しようという「チェルノブイリの人質たち」基金の呼びかけに、真っ先に応えたのだ。地区内のすべての団体とナロジチ営林署が、いっせいに募金を振り込んだ。地区の成人4,000人(地区人口は約10,500人であり、うち半数は年金生活者)がキャンペーンに参加した。特記しておきたいのは、ナロジチ町の「お陽さま」幼稚園では、園児(の保護者)全員から寄附があったということである。この幼稚園だけで2,500グリヴナの寄附があり、地区全体では約22,000グリヴナであった。

多額の募金があったのは、ジトームル州税関(職員数800名)―51,497グリヴナ、非常事態省州支局(920名)―37,000グリヴナ、かつて日本からの支援を受けたブルシロフ地区病院(200名)―16,054グリヴナ、州立小児病院(500名)―14,100グリヴナ、コーラステン市内務省支局(35名)―8,597グリヴナ。募金を直接届けてくれたのはチェルノブイリ障害者基金(会員数171名)、「リクヴィダートル」基金(120名)、「チェルノブイリの消防士たち」基金(160名。同基金からは5,000グリヴナの銀行振り込みもあった)、「チェルノブイリの鐘」基金(L.アントニューク代表、150名)。

ジトームル第25番学校のことも特筆に値する。この学校はもう10年以上、「救援・中部」と友好関係にあり、我々

の基金の主催するキャンペーンにはもれなく参加している。1グリヴナや2グリヴナの紙幣、50コペイカ以下の貨幣がつまったビニール袋を開けて金額を数えるのは、涙なしにはできない作業だった。募金の総額は2,992グリヴナだった。我々はそれを銀行の窓口で渡し、銀行ではそれは無味乾燥な入金としてコンピュータで処理されたが、この袋を日本に持って行き、福島県の子供達に、友好・理解・同情的のしるしとして手渡せたらと痛切に思ったことであつた。

年金生活者たちのことについて、別途記しておきたい。私たちの呼びかけに最初に応えたのはこの人たちだった。我々がラジオに出演したその翌朝、ジトームル市から20km離れたサトキ村から、78歳のラトケーヴィチ氏がやってきた。彼は、「20年も我々を支援してくれている日本人の助けを助けるのは自分の義務だと思う」と言った。ちなみに、汚染地域からの移住者の村であるサトキ村の医師駐在診療所では、2005年、日本国外務省の「草の根無償支援」プログラムの資金で機器が購入されている。残念ながら、同じプログラムで支援を受けた他の26ヶ村からは反応がなかった。概して、このキャンペーンにおいて自分の果たすべき役割を、すべての人が理解したわけではなかったと言わざるを得ない。キャンペーンは、良心の有無を示すリトマス試験紙となったのである。言葉の上では、皆がキャンペーンを支持したかのようなものではあるが、実際にはそうではなかった(州議会議員の中には、「日本は豊かな国なんだから、支援などすることはないだろう」と言った者たちもいた)。「豊かな国」という意見に対しては、次のように言っておこう。我が基金での22年の仕事、そして「救援・中部」との21年にわたる友好と交流は、日本が本当に豊かな国であることをわからせてくれた。善良さや、他人の不幸を分かち合い、助けようとする気持ちに恵まれているという意味で豊かなのである。1945年に廃墟と化した日本は復興した。今回の震災後、太平洋岸では数百kmにわたってすべてが押し流されたが、今日すでに道路は再建され、通信もすべて復旧している。ただ仕事をすればよいのである。だが、この単純な真理が、我々には理解されていないのだ。

さらに何人か、キャンペーンに参加してくれた年金生活者の名を挙げておこう。しかし120万の州人口に対し、その数はいかにも少ない。明らかになったのは、他国の不幸への対し方は、自国の不幸への対し方とつまりは同じだということだった。そんなことはないと言う人もいるかもしれないが、私は自分が正しいと信じている。全国紙『デーニ(日)』は、

我々のキャンペーンに関する記事を掲載し、銀行口座番号を書いてくれた。募金が殺到したとお考えだろうか？ キエフから1件、それも元ジトーミル市民のオレク・トゥドエーフから300グリヴナの振込みがあったきりだった。

年金生活者たちはお金を直接持って来てくれた。エンマ・ブードニク(100グリヴナ)、ユーレイ・レイバク(100G)、オリガ・コロソフスカヤ(110G)、ソフィヤ・ドブロヴォーリスカヤ(50G)、アンナ・ルシパエンコ(100G)、エレナ・シケティーナ(50G)、アンナ・シニーツィナ(50G)、ヴィクトル・シャフランスキー(150G)、イーゴリ・アレクサンドロフ(100G)、ミハイル・ブルガーコフ(20G)、イヴァン・チュマク(200G)、エンマ・ホーロト(60G)、エカテリーナ・ゲトマン(100G)、ヴァーレーイ・マエフスキー(100G)、チェルノブイリ障害者の年金生活者71名(1,500G)、ズィナイーダ・シェバルダーエヴァ(30G)、タマーラ・スプルーン(40G)、ポーランドのマイダネク強制収容所の囚人だったフランツ・ブルジェズィツキー 86歳(50G)、ヤドヴィーガ・カミンスカヤ(50G)、リュドミーラ・チュムト医師の母アンナ・チュムト(100G)、ヤドヴィーガ・ミャフカヤ(100G)、匿名希望者4名(200G)、セルゲイ・アンドロソヴィチ(47G)、ドミトリー・ゾレツキー(200G)。日本に行ったり、あるいは「救援・中部」と直接のコンタクトがあったりした人たちのことも書いておかなければならない。レオニード・アントニューク、ライサ・アルチュフ、ズィノーヴィイ・パラモーフ、アンナ・ゴンガルスカヤ、アナトーリイ・クリシである。彼らはみな500グリヴナを寄附した。「チェルノブイリの人質

たち」基金の運営委員たちはあわせて1,350グリヴナを寄附した。

キャンペーンに参加し募金したのは、総数約9,800名である。

最も大口の寄附は以下の通り。

ジトーミル州税関—51,497グリヴナ

医療関係者—42,391グリヴナ

年金生活者(団体を含む)—19,905グリヴナ

内務省州支局—15,570グリヴナ

職業安定所関係者—3,334グリヴナ

行政関係者—2,745グリヴナ

ナロジチ地区(全体で)—21,915グリヴナ

ジャーナリスト—4,610グリヴナ

キャンペーンへの参加は自発的なものだと私は理解しているので、100グリヴナや50グリヴナはお金のうちに入らないと思っているような人たちに強制することはできない。ただ、このようなキャンペーンを行った後では、自分の国、州、その人々のことが恥ずかしくなる。20万グリヴナ(約25,000ドル)という額が集まったのはそれなりの成果だろうが、しかし私個人としては喜びを感じられない。ひょっとすると、私は人々からあまりにも多くを求めているのかもしれないが、しかしそうではないと思う。とはいえ、どんな状況においても人間であり続けるということは、多くの人にとって非常に困難なことであるようだ。

親愛なる日本の友人の皆さん！

「チェルノブイリ救援・中部」のおかげで、もう25年間チェルノブイリ原発事故の被災者を支援している基金の代表として、地震と福島第一原発事故に対し、心からの同情の意を表させていただきます。

私たちは誰よりも、よく原発事故の悲惨さを知っていますので、皆さんの不幸をとりわけ痛切に感じました。その不幸を皆さんと分かち合っています。皆さんはいつも私たちに「頑張れ！」と、言って下さいます。今、私たちは皆さんに同じ言葉を言います。いつも力を合わせましょう。そうすればどんな不幸も消え去ります。私たちは不幸に打ち克つのです。「チェルノブイリの人質たち」基金 代表 V. キリチャンスキー



2011. 04. 26

ウクライナから 3.11 東日本大震災 被災者へのメッセージ 2011. 4. 26

私たちはいつも皆さんのお国からの朗報を、
待ち切れない思いで待っています。
この困難な時、皆さんを励ましたい気持ちです。
すべてがすみやかに復興することを願っています。
すべてうまくいきます。
私たちは皆さんとともにあります。

T. V. ヴォリヌツカ
(ジトーミル第25番学校 教師)



親愛なる友人の皆さん
私たちは皆さんを
励ましたいと思います！
皆さんの大変な状態がわかりますし、
皆さんにとって困難な時、私たちが皆さん
と思いを一つにしていることを、知っ
ていただきたいのです！
すみやかな復興、ご健康をお祈りします。
お互いに助け合われますように！
お元気で、仲睦まじくお過ごしください。

*イルィナ 2011. 04. 26



私たちの哀悼の思いをお受け取りください。
すべてうまくいきますよう。

N. V. メリニク
(ジトーミル第25番学校 教師)



※「子どもの頃、チェルノブイリの被災者にと日本から千羽鶴を贈られた記憶がある。今度は私たちが日本の被災者を励ます時が来た。」と、手作りのカードやプレゼントを届けてくださった。それらは運営委員により、日本の被災者に届けられた。

ナロジチ地区の住民たちは、原発事故で被災された
日本の方々を応援しています。
私たちは皆さんとともにあります。

マリヤ・パシュク
(ナロジチ地区中央病院 院長)



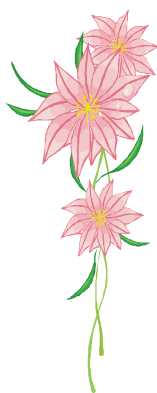
ジトーミル州の事故処理作業員である、消防士たちを代表して、犠牲に見舞われることなく、天災と福島第一原発事故の事後処理が行われますようお願い申し上げます。

私たちは皆さんとともにあります。それがどんなに危険な仕事であるか私たちは理解していますが、この地球に生きとし生けるもののために遂行しなければならないのです。

私たちは皆さんと皆さんの勇気を信じています。

世界を救うことが私たちの運命であり、仕事であったのです。

0. トヴァンスキイ (左) B. チュマク (右)



福島第一原発事故の事後処理に関する 皆さんの偉大な功績に心より感謝いたします。

敬意を込めて

レオニード・アントニューク

ウクライナにて 2011年4月24日

(チェルノブイリ原発事故の 事故処理作業員)



日本国民の方々に深い同情の念を表させていただきます。
事故処理作業員の方々が忍耐と職業意識に恵まれますよう。
我々の国で犯された過ちが、日の出づる皆さんの国で繰り返されることのないよう願っています。神のご加護がありますように。

ウクライナの事故処理作業員たちより、

皆さんに深いお辞儀をお送りします。

0. コヴァルチュク (チェルノブイリ原発事故の 事故処理作業員)



日本とウクライナ、私たちと皆さんはかくも近く、かくも遠いのです。
共同の住居である地球が、私たちを結びつけています。
私たちは地球に責任を負っていますし、
チェルノブイリと福島悲劇が私たちを結びつけることになったのです。
ウクライナ国民と日本国民はこの点で一つです。
ともにこの悲劇に打ち克ちましょう。
ウクライナ国民と日本国民、そして地球の未来の名において。
私たちは皆さんと強く連帯しています。

ペトロ・ツィムバリユク
(チェルノブイリ原発事故の 事故処理作業員)



親愛なる日本の友人の皆さん！

私たちは皆さんの不幸を分かち合い、それを自らのもののように感じています。
皆さんのご協力をいただいたこの年月、皆さんと日本国民は、私たちにとって親戚のような存在
になりました。私たちは皆さんを愛していますし、
できるかぎりのサポートをさせていただきたいと
思います。
皆さんがこの苦難を乗り越えられ、皆さんの子どもたちに、
幸せな未来が待っていることを私たちは信じています。
タチアナ・クラフチェンコ (ナロジチ町おひさま幼稚園 園長)



皆様のご不幸を

本当にお気の毒に思います。

ポグレブニチェンコ



皆様のご不幸についてうかがっています。
頑張ってください。すべてうまくいきます。

レーラ・ルキヤンチュク



復活祭

おめでとう

ございます!!!

頑張ってください。

ハレイナ・メリニク



ご不幸をお気の毒に思います。

この問題がなるべく早く

解決されることを願っています。

ターニャ・プリシャジニユク



皆さんに励ましの言葉をお送りします!

頑張ってください、

まもなくすべてうまくいきます!

ナターリヤ・クズメツォーヴァ



皆様のご不幸についてうかがっています。

哀悼の思いをお受け取りください。

この不幸はすぐに過ぎ去ると思っています。

イリヤ・ピトケーヴィチ



皆さんに同情します。

このような惨事が、二度と

起こらないよう願っています。

アナトーリー・イヴァンツォフ

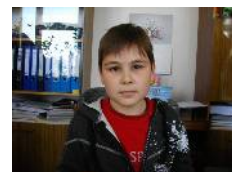
2011. 04. 25



皆さんをお気の毒に思います。

このようなことが、もう二度と起こりませんように。

キリル・チェルニャフスキイ



今回の訪問の目的は、まずナロジチでの『菜の花プロジェクト』の今後について、農大のディードゥフ氏や州行政・ナロジチ地区行政など、各方面の人々と話し合うことでした。結論から言えば、ジトーミル州行政長との話し合いで、州内で菜の花栽培の拡大が計画されることになりました。

次にナロジチのナタネ畑を視察。バイオガス発生装置付属施設の貨車で発生した火災の、原因や今後の対処について、ディードゥフ氏およびラスキ村のカバツキー氏の考えを聞きました。また「ホステージ基金」では、ウクライナのリビウ市から購入予定の放射能測定器についての進捗状況、『放射能測定器を贈るキャンペーン』などの報告がありました。訪問団メンバーは、河田・戸村・竹内。

◎ 『ウクライナから日本へ放射能測定器を贈るキャンペーン』

福島原発震災の被災者救援活動として、ジトーミルで取り組まれている『放射能測定器を贈るキャンペーン』について、詳細が報告されました(P6 に関連記事)。キリチャンスキー氏によれば、

「ジトーミルの多くの人や組織・団体がカンパしてくれて、約 20 万グリブナが集まっている。例えば、州の税関職員(1,000 人)、州警察職員(1,000 人)、州非常事態省、ジトーミル営林署などの行政機関に、ジトーミルシチナ紙など新聞社が協力してくれた。また、日本から支援を受けたナロジチ病院(1,500 人)、州立小児病院、ブルシロフ病院、「チェルノブイリの消防士たち基金」などが募金を集めた。ジトーミル 25 番学校(1,000 人)ではバザーを行なって募金、ナロジチ地区ではナロジチ新聞など 20 団体が協力し、州内で最大の募金を集めた。ナロジチのおひさま幼稚園では、教室に募金箱が置かれている。

また個人では、グサクさん・パラモノフさん(州保健局関係)、ゴンガルスカヤさん・アルチュフさん・チュマクさんなど(各ホステージ基金メンバー)、クーリシ氏(カレンダーハウス…日本から送ったカレンダーで移住の家を購入された)等。日本へ行ったアントニューク氏は、募金呼びかけの手紙をあちこち持って行って、大変助力してくれた。それから、年金生活者たちが 20・50・100 グリブナと乏しい年金から持ってくる。以前にチェル救から薬代などの支援を受けた人は、その恩を忘れてはいない」と、胸を打たれるお話でした。ホステージ基金のメンバーは、ラジオに出演したりして広報に努めているとのことでした。

◎ 震災・津波・フクシマの被害について、農大ディードゥフ氏の話

「チェルノブイリ事故の第 2 ゾーンでは、91 年まで農業をやっていた。表土をひっくり返し、下に埋めた。作物の汚染は 1/10 に下がった。最初、鋤で 30cm をひっくり返し、次にもう一度ひっくり返して有機質の 20cm が上になるようにした。23 年間、汚染地のモニタリングをやってきて、自然のプロセスで表土の放射線量は下がっている。しかし、地下水や沼地などの放射線量はまだ高い。昨日ナロジチへ行ってきたが、第 2 ゾーンのプリスチノウカ村では、線量が 40 マイクロレントゲンの場所からわずか 180cm ぐらい離れた所のホットスポットでは、250 マイクロレントゲンまでも上がった。井戸があり、



流れた水が溜まったものか？ フクシマでも、水の溜まる場所が高くなるのではないか？」ナロジチの汚染地を長く見続けてきた氏の話が、フクシマの未来に重なって見え、これまで以上に放射能汚染の現実を感じました。

また、『菜の花プロジェクト 5 年目のまとめ』の報告会開催と報告書の公表を、来年 3 月に行うことになりました。

◎ ジトーミル州行政長、州内で菜の花栽培の拡大計画を発表

「25年経った現在、チェルノブイリ25年を分析するだけでは、被災者に充分ではありません。復興が必要で、それは皆さんのプロジェクトの方向です。復興の効率的な方策は、植物を使ったものです。国からの助成という形ばかりではなく、新しい助成プログラムでなければなりません。植物による復興を位置づける提案です。政府はこれを受入れ、来年度予算に皆さんの計画が組み込まれています。自分は州行政として、2012年にはより大きな規模で、30万haでナタネ栽培を計画しています。病気の人に医薬品提供するとともに、その原因を絶つ予防にプロジェクトが必要であるということを政府に提言しています。」



〈ジトーミル行政長（左）、
州内でナタネ栽培拡大計画を発表〉

◎ ナロジチ地区行政長との懇談

「個人として、ナロジチ地区住民代表として、フクシマの被害に同情します。我々は同様の体験、精神的・物理的困難を知っています。ナタネプロジェクトのBDF製造は興味深い。汚染地で加工用作物の栽培が可能と実証された。BDFは、車・トラクター燃料に使える。残念ながら、ナロジチ地区の自力ではナタネ栽培の拡大は経済的に無理で、農機具も必要だ。州行政がやるなら、地区内の汚染地で加工用作物栽培ができれば、税金が入ってくるし雇用も生まれる。ナタネプロジェクトのBGは興味深いが、家畜の糞・雑草も活用できることをセミナーで紹介するとよい。BDF同様、経済的問題があり、地区人口は11,000人で労働力しかないが、住んでいる住民を置き去りににはできないので、BG発展にも協力していきたい。これまでの研究実験は順調で、これからも発展していけば、ウクライナ・日本にとって利益があり、ナロジチ地区のみでなく、日本の被災者にとっても役立つと考える。」

◎ カヴェツキー氏の話

「貨車の火事の原因は、雷・電気のショートが考えられるが、ガスの発生とは関係ないと思う。これまで一緒にやってきたし、BGの経験も得られてきたから、これで止めるというのではなく、使い方も相談してやっていきたい。実験を終わらせるのはそれでよいが、その後ガスをどう使うかが問題だ。自分としては、実験を続けられたいのなら貨車を直すか、一方で新しいものを牛舎側に作りたい。」

日本も大変なので、自分でも何とか考えたい。今ある装置での実験が終わった後は、実用に使うのは難しい。新しい装置を作るなら、実用的になるよういろいろ考えたい。」



〈火災のあった
BG装置付属貨車内〉



〈実った秋蒔きナタネ畑〉

◎ 全体のまとめの話合い

デイ氏：もう一年継続して、1,000haぐらいから始めるための下調べ、どこに適切な土地があるか、土壌の分析などをしてはどうか。

チェルQ：BDF装置は、400haのナタネに対応できる。そうなっていくと、政府レベルの話になっていく。

デイ氏：大規模BG装置建設は、慎重に事前に検討すべきだ。ナロジチ地区の「どこにどのくらい牛・豚がいるのか」「どこに村があり、どこが適当か」「どこにガスが必要か」など、農大の学生に、ナロジチ地区でのBG材料の実際の可能性について、アンケートをとって調べさせることもできる。

定期総会&チェル救デーが開催されました

梅雨まっただなかの6月18日、定期総会 & チェル救デーが開催されました。事務所が入居しているビルにある、4階のホールをお借りして行いました。今年度は役員改選の年で、理事は全員留任、新代表に神谷 俊尚さんが就任されました。4年間の長きにわたって代表を務められた小牧さん、本当にお疲れ様でした。

チェル救デーでは、6月から始まった南相馬市での放射能測定についての報告を池田さん・神谷さん、ナロジチでの菜の花プロジェクトの報告を河田さんにいただきました。最後に戸村さんより、新たな「脱原発ネットワーク」設立の動きについて、報告がありました。今まで「反原発」に無縁だった人たち、特に若い人たちが、この事故をきっかけに原発問題に取り組み始めたのです。

最近、救援・中部のスタッフによる講演会があちこちで開かれており、どこも盛況ですが、なぜかお膝元の総会は、こじんまりと和やかでした。またこれからの1年、気を引き締めて活動をしていきます。皆様のご支援よろしく願いたします。
(市原佳代)

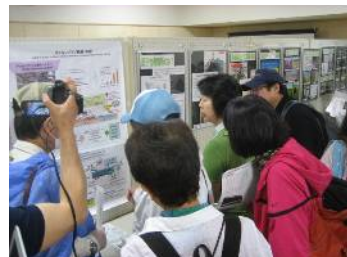
【新代表 神谷俊尚さんのご挨拶】

チェルノブイリ原発事故25周年、チェル救が活動を始めて21年目の今年、正直に言って日本で原発事故が現実には起こるとは思っていませんでした。口では原発の危険性を言いながら、起こらないのでは…と日常に流れていた自分を今、情けなく思っています。

「自分でできることは何でもしていこう」…これが今の気持ちです。「チェル救として何を…」ではなく、「できることを皆がしていく」、その結果として「チェル救は何ができたか？」が問われると思っています。

1万人ハンカチパレード -グッバイ原発! さよなら放射能!!-

6月26日(日)、「福島アクション」に参加しました。朝9時に福島市のAOZアオウゼ(MAXふくしま4階)に集合です。とても名古屋からでは、間に合いません…で、前日入りしました。会場説明図に従って、設営作業開始です。大内さんと半澤さんがお手伝いしてくださいました。パーティーション組み立てのあと、パネル展示を行い、福島市の皆さんに私たちの「菜の花PJ」を紹介しました。



チェル救ブースは、たいへんな人ばかりで、しかも大変熱心に見入っている方が多く、じっくりとキャプションを読んでもらえました。パネルの前で、市民の方同士で議論が始まった場面もありました。

<チェル救へのお尋ねやご意見の数々>

- ① ヒマワリとナタネとでは、何が違うのか? チェル救はどうしてナタネを選んだのか?
- ② 今、福島では種を蒔く人たちがいるが、本当にそれで良いのか?
- ③ 残渣をどうするのか?(今は実験段階ですが、今後は菜の花PJの説明図に、処理方法も加筆する必要があると思いました。)
- ④ 「チェルノブイリ事故の犠牲者数」といったデータの根拠は?
- ⑤ 食品の放射能基準の設定をどうするか? 迅速な食品測定が必要なのではないか?
- ⑥ 福島でも、ナロジチのBDF/BGを伴った菜の花PJのようなシステムを展開してほしい。
- ⑦ 菜の花PJの実験を、国(日本政府)が億という資金を出して、共同で福島に研究施設を作るとしたら、大変ことになるのではないか? ただ植えるだけのことに、チェル救のプロジェクトが利用されかねないと心配だ。

皆様の真剣なまなざしから、「放射能による日常的な不安を、一日も早く払拭したい」という願いが、強く伝わってきました。

(神野美知江)

竹内さんのウクライナ便り

来年は、欧州サッカー選手権大会がポーランドとウクライナで開催されるということで、キエフ市庁舎の正面入口上に「同大会開始まであと〇日〇時間…」という秒刻みのデジタルカウンタダウン計(?)が設置されましたが、およそスポーツに関心のない私は、いつそれが始まるのか覚えていません。1年以内だということくらいは理解しているのですが、決勝戦が行われるという都心の国立スタジアムも、せっせと改築されており、そのそばでは新しいビルの建設が進んでいます。ウクライナでは、キエフ以外の3市でも試合があるそうですが、それぞれ準備が行われているでしょう。この催しのため多額の国費が投入されており、各種の法的措置も取られていて、例えば「同大会にあわせて一定の商品につき輸入関税を免除する」という決定が下されました。しかしその商品の中には、「毛皮の衣類」「香水・化粧品」「織機」など、サッカーとの関連性を認めにくいものも多々含まれており、同大会組織委員会は、さすがにリストの見直しを表明したとのこと。いずれにせよ、この一大イベントに伴って動く多額のお金にたかって、多くの政治家・実業家がうまい汁を吸おうとしているだろうことは想像に難くありません。反政府系の雑誌では、「誰のための大会か?」と題した特集も組まれています。

一方で、職権濫用などを理由とする元与党・現野党の政治家たちの裁判は続いており、特に「ウクライナの国益を損うガス価格協定をロシアと結んだ」ことでも罪に問われているティモシェンコ前首相の刑事事件については、民主主義にもとるものとして西側諸国が憂慮を表明しており、元在ウクライナアメリカ大使は、「この裁判は、来るべき最高会議選挙に向けて、野党のリーダーである彼女を排除しておこうとする試みである」との意見を、ウクライナの英字新聞に寄稿しています。ヤヌコーヴィチ大統領はEU加盟の目標を掲げており、年内にEUとの連合協定を締結したいとしています。上記元アメリカ大使は「民主主義の原則の侵害がそのまま続くようであれ



<記者会見で通訳中の竹内さん(右)>

ば、キエフとヨーロッパの距離は開くばかり」と決めつけています。一方、ティモシェンコ氏は法廷で裁判官たちに対する不信を露呈、弁護士を排除して自らの弁護にあたるというきわめて強気の姿勢を見せていますが、その態度がやや虚勢じみて感じられるのも事実で、国民の間に「民主主義の原則の侵害」が行われているという危機感が、どの程度強まっているかは疑問です。

とはいうものの、8月下旬に独立20周年を控えたウクライナで、祝祭の雰囲気は広まっているとはお世辞にも言い難く、むしろこの20年は何だったのか、一握りの政治家・官僚・財界人によって国富がわがものにされただけだったのではないかと、という苦い認識も一部にはあります。IMFの融資を受けるにあたっての条件の一つだった年金改革の法案も最近可決され、「女性の老齢年金受給年齢が現行の55歳から段階的に60歳まで引き上げられる」「年金受給のために必要な労働年数が10年上乘せになる」などの変更が行われることになりました。しかし、現在年金総額が国内総生産の18%を占める一方で、平均年金額(約12,000円/月)がヨーロッパ諸国中最底という現状が、この改革によりどれほど改善されるのかはよくわかりません。現在、約10万円/月以上の年金をもらっているウクライナ国民は4,000人程度に過ぎないそうですが、今回の改革により、老齢年金の最高額は最低年金額(約7,600円/月)の10倍に抑えられる由。ちなみに現在の最高額は45万円/月ほどで、国家英雄のテストパイロットが支給されているとのこと。(7月29日)

事務局便り

チエル救運営委員は、福島・南相馬支援に集中して活動を活発化させている。特に「昔の青年達」の動きは、目を見張るものがある！？ 東北への思い入れのなせる業か、福島通いを隣の「イーオン」に出掛けるかのように、難なくこなす神谷理事を筆頭に、走る走る！！ その中に、ニューフェイスがいる。「南相馬放射線量率マップ」作りの達人竹内雅文さん。そして、海外向けホームページ作成班を結成し、ベラルーシの A.ネステレンコ氏著の「農作物への放射能対策」の翻訳を手がけ、多くの情報を提供している大下雄二さんだ。大下さんは、昔チエル救メンバーズで、ポレシーの編集子であった。3月11日以降、いてもたってもいられなくなった人々が大きく動き出したが、この二人もついにチエル救運営委員会に参加。自動的に委員となった。どちらも、ともかく語学堪能で「技あり！」。高い知見と行動力の人である。チエル救益々活性化。しかし、ただひとり、へたばっている、私。残念！！ (山盛)

お宝ネット 発送先および連絡先

〒399-4511

上伊那郡南箕輪村南原 9955-2 原方「救援・中部 お宝ネット」宛

TEL 0265-73-9355

Fax 0265-73-9352

「おひさま幼稚園」に念願の遊具が贈られました



昨年末、サレジオ小学校の子ども達が頑張って集めた資金は、ナロジチ町幼稚園への支援として贈られ、「美容師さん(ごっこ)セット」「台所(ごっこ)セット」「お店(ごっこ)セット」「ボールプール(左写真)」「足裏マッサージ用カーペット」などの遊具が整備されることになりました。

それらは、すでに購入され、「サレジオ小学校の支援」と書かれたステッカーが貼ってあります。子ども達は、さっそくボールプールでご満悦です。子ども達から子ども達への架けはしができました。「草の根支援」で建物の改修工事が行われ、次に遊具が整備されました。ナロジチの子ども

達にも、楽しい幼稚園生活を過ごしてもらえそうですね。

(塚本)

編集後記

☆いくら夜道が危ないといっても、この節電の折、頭上の外灯は明るすぎる！と腹立たしげに見上げると、ぽっかりまん丸のお月様が自慢げに輝いていました。おみそれいたしました。(佳)

☆狭いけれど、クリスマスローズが咲くちょっといい感じの庭に、この暑さのおかげでそれ以外の植物が大盛況。ホントは「草取り」しなきゃいけないんだけどね。草原になっちゃった…。(美)

☆いよいよ、世界の支配者が失墜する時が、目前に迫って来た。今、インターネットでは、「貴方を洗脳から覚醒させるアメノウズメ塾」という動画サイトが注目されている。「911 自作自演事件」から始まり、「地球温暖化詐欺」「戦争捏造」「人口削減計画(ワクチン)」「ビートルズ解散の訳」「マイケルジャクソンの死因」そして「311 人工地震」など、以前には「陰謀論」の一言で片付けられていたテーマに、真実を突きつけている。もう一つの動画サイト「地球維新」(のベンジャミン・フルフォードさんの講演記録)とともに、是非、視聴をお薦めしたい。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052)871-9473